
神様なんていないんだ

天野久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様なんていいないんだ

【Zコード】

Z9719Z

【作者名】

天野久遠

【あらすじ】

片親で育つた幼い少年同士が、ある冬の日、事故で大怪我をした子犬のチロを見つけ、看病を続けたその先にあつたものは、あまりにも無情で切ない結末だった。

そして幼い心を傷めながら少年たちは現実を知る…この世には神様なんていないことを。

ボクはミツキ、小学1年生。

転校して来たばかりのボクに友達らしきヤツはない。

そんなボクだけど、ひょんなことからはじめての親友ができた。

そいつの名前はケイタ。

彼もボクと同じように片親で育ったヤツだった。

だけどケイタは、ボクとは違つて頭もいいし要領もいい。

ケイタとボクの関係は喧嘩で始まり、宿題忘れで結束した。

ボクには父がない。

そしてケイタには母がない。

両親のいない状況は違つても、感じるものは同じなのだろう。

気がつくとボクは、いつもケイタといた。

登校の時は決まった場所で待ち合わせ、下校の時は一緒に帰る。

そうしたある雨の降つていた日のことだつた。

いつものように、ふたりで雨の中を歩いた時に、かわいい1匹の子犬を見つけた。

でもその子犬は、脚やお腹に怪我をしているようだつた。

そんな身体で、雨に打たれ、寒そうに道の端にうずくまつて震えていた。

怪我…きっと車にでも引かれてしまつたのだろう。

どうやら親犬もいなければ、飼い主がいるようにも見つけられない。

そんな子犬を見て、

「きっと捨てられたんだな…可哀想だな。」

ケイタが言った。

ボクは「そうだな。連れて行こうか?」

と答えながら、その子犬を両手に抱きかかえた。

捨てられた子犬。

親もなければ面倒を見る人もいない。

そんな中で大きな怪我。

ボクたちふたりは、そんな子犬に自分たちの状況を重ねたのかも知れない。

それでもまだ、自分たちの方がこの子犬よりはましだった。

面倒を見てくれる親がいるし、じいちゃん、ばあちゃん、そして親戚だっている。

ケイタが言った。

「基地に連れて帰つて、ふたりで飼つてやろ。」

子犬は不安なのか、寒いのか、それでも怪我が酷く痛いのか、
暴れるそぶりも見せないで、ボクの腕の中で「くうーん。くうーん。
」と、小さく、弱く啼いて震えているだけだった。

「早く帰ろうぜ。」

そういうつてボクは、置いていた傘を閉じて小走りで駆け出した。

「オレ、家から救急用具をもつてくるから…。」

ケイタはそう叫びながら、彼の方へと消えて行った。

「ボクも急いだ。

「本当は家に連れて帰つて、ちゃんと手当をしてやれればいいんだけど…。」

「でも、そんなことは出来そつにもない。ケイタのところにして
も同じだ。」

「だけど心配しなくていいんだぞ。」

「ケイタとふたりで作った秘密基地があるんだ。」

「セレーネちゃんと手当をして、ボクたちが飼つてやるからな。」

ボクは走りながら、不安そうに震えている子犬にせつまつてやつた。
怯えたように震える子犬に、ボクが今できる」とと言えばそれくら
いしかなかったんだ。

ふたりの秘密基地についた。

とにかくケイタが救急用具を持って来るまでこのまま待つしかない。
秘密基地の中には、缶詰めやお菓子、そして毛布が置いてある。

ボクは震てる子犬を毛布でくるんでやつた。
そしてサバの缶詰めを開け、皿の上に出して子犬の口元に置いてや
つた。

でも全く食べようとはしない。

「お腹、痛いのか？ それとも脚か？」

「心配いらないぞ、ケイタが来たら直してやるからな。」

「お前、とっても可愛いから怪我を直してここで飼つてやるからな。」

「 今日からここがお前のお家だぞ。」

ボクも不安でたまらなかつたんだ。
子犬には分からなかつたんだ。
慰めてやる。

そうして、ケイタが救急箱と牛乳を抱えてやつて來た。

「 へたくそだけど…」

怪我した子犬のお腹に包帯を巻きながらそう言つた。

「 ミルク、温めないとダメかなあ？」

「 ボク、家で温めてくるよ。」

そう言つと、ケイタと子犬を基地に残してボクは急いで駆け出した。
牛乳を温めたついでに、置いてあつたお金を全部持ち出して基地へ
と戻る。

「 早かつたな。こいつ、脚が折れてるようなんだ。」

そういうつてケイタは子犬の足を撫でてやる。

「 木を探して来る。添え木をすればきっと良くなるさ。」

そう言つて、今度はケイタが基地から飛び出す。

こうしてボクとケイタは、入れ替わり立ち代わり基地から出でてはモノを探した。

「 クーン、クーン…。」

子犬はいつまでもそういうつて啼いていた。

「きつと、とても痛いんだな。」

「病院に連れていこうか?」

「そうだな。でもお金が沢山かかるぞ。」

「それじゃ、お金が貯まつたら連れていくことにしようぜ。」

ふたりの相談はまとまつた。

そうしてその日は子犬を基地に繋いで一人は帰つた。

翌日の朝、ボクが基地に向かうとケイタが先に来ていた。

「様子は?」

ボクは恐る恐る尋ねた。

「昨日よりはいいんじゃないかな?」

「少し、元気になつたように見えるぜ。」

そう言いながらケイタは子犬の包帯を換えてやつていた。

「お金、この中にためていこう。」

ボクはそついつて、持つて来た陶器の貯金箱を差し出した。

「牛乳、ここへ来る前に取つて來た。」

「今日は冷たくても飲んでるよ。」

「ちよつとは元気になつたんだな。」

ケイタとボクは顔を見合せて微笑んだ。

「俺もお金集めてくるから、学校からは別々に行動しようぜ。」

そう言いながら、その日ふたりは登校した。

ボクは学校帰りに鉄くずを集めた。

集めた鉄くずは、近所の屑鉄屋のおじさんが買い取ってくれるんだ。
特に真鎘は高くとつてくれる。

だから、ボクは見境なく車やトラックのタイヤからキャップを盗む。

急いでタイヤのキャップを取ると「キィィーン」と、とてもかん高い大きな音を出す。

だからゆつくり、そつと少しづつキャップから空気を漏らしながら外さないといけない。

一方ケイタは、ビールの空瓶や一升瓶を集めでは酒屋に持っていく。空瓶がそれほど見つからない時は、別の酒屋の裏から空瓶を盗んでは別の酒屋へと持つていった。

こうして毎日、学校がえりはモノ集めに没頭し、基地に行つては子犬の怪我を見ては包帯を換えてやる。

そして数日たつたころになつて気づいたことがあった。

この町には動物病院がなく、治療費も幾らいるのかも分からぬ。それでもとにかく、お金をためることにした。

子犬の容態はといえば、怪我をした翌日以上に良くなる様子がない。特にお腹の怪我は、何日たつても良くなつてくれず、だんだん弱つていくようだった。

ケイタは何だか、そんな子犬を見るのが忍びなくなつていたのだろう。

朝は一緒に登校しなくなつたし、学校でボクと会つてもお金だけを渡す。

そしていつしか…基地へも来なくなつていた。

ボクはその間、朝も夜もひとりで子犬の看病した。

それから数日経つてケイタが突然やつて來た。

その日は朝から、ボクは子犬の傍にいた・・・子犬がかなり弱つて
いたから。

もう・・・そのまま子犬は元気にはなりそうもない。
だから傍にいてやらないと。

ボクは学校にも行かないで、そいやつて朝からずっと子犬の傍にい
た。

それがボクの・・・小学校を休んだ最初で最後の日だつた。

容態の悪い子犬を見てケイタは泣いていた。

ボクも泣いた。

一緒になつて・・・子犬も泣いた。

「クーン、クーン」と力なく、悲しく、訴えるように何度も泣いた。

ケイタは思わず基地を飛び出して行つた。

もしかするとケイタは、自分が顔を見せないうちに子犬が元気にな
つて、基地の周りを走り回つていると思ったのかも知れない。

それがこれほどまでに弱つてしまい、彼が最後に子犬を見たとき以
上に弱つて・・・。

そう思ふと、ボクには彼を追い掛けることが出来なかつた。

ケイタに母はいない。

彼がもっともつと小さな時に、交通事故で死んでしまつたのだ。

手術後の経過が良くなくて、苦しんで、段々と弱つていつて、彼が

見ている前でも「一度とは田を開けなくなつたのだ。

以来、ケイタは父親に厳しく育てられ、優しくされた思い出もなくなつてしまつていた。

だから彼は、優しくされたいという気持ちが人一倍強いのだと思つ。そんな彼だから、優しさも人一倍なのだらう。

今回のことだつて、子犬の怪我のために毎日毎日、夜遅くまでお金になるものを探していた。

ボクはそんなケイタの気持ちに責任を感じて、後を追うことができるなかつたんだ。

そして何よりも、このまま子犬をひとつにはできなかつた。

しばらくするとケイタは戻つて來た。

「「めんな、オレ…。」

「いいよ、きっとボクが悪いんだ。」

「もつとちやんと、看病してやらなくつちやいけなかつたんだ。」

「お前はこいつのために、夜遅くまでお金を見つけていたんだし…。

・ボクが悪いんだ。」

ボクがそう答えるとケイタは言つた。

「このままだと可哀想すぎるよな。」

「こいつ、探してくれる飼い主も居なきや、親も居ない。」

「せつかく生まれて來たのに、優しくもしてもらえない…。」

「なのにこんな怪我までさせられて、こいつとも痛くて痛くて…。」

「これじゃ余りに…可哀想すぎるよな。」

そう言ってケイタは、悲しそうな顔をしてもう一度・・・墓地から

出て行つた。

きっとケイタの家の奥には、彼の母が逝つた日の光景が映つていたのかも知れない。

そして夜が深けた。

ボクは迷つていた“家に帰ろうか帰るまいか”と。

そうしてゐるとケイタが温めたミルクを持ってやつて來た。

「どうだ？ やつぱり良くなりそうにないか？」

「ああ、とても弱つてゐからなあ、もう…ダメかもしけない。」

「そうか…。オレ、今夜友達のところへ泊まると書つて出て來たんだ。」

「今日はおとつせん夜勤だから。オレ、見てるからお前は帰つてもいいぞ。」

「でも…。」

「それじゃ、ボクも後でまた来るから頼むな。」

ボクがそう言つと、ケイタは子犬の傍に来てミルクを置いて悲しそうに見つめていた。

「ああ…。」

そう答えるケイタを残して、ボクは家へと駆け出した。

家に帰つたボクは、母の作り置いてくれていた食事をさつと済ました。

そしてお膳の上に置き手紙をした。

「今夜は友達のうちに泊まりにいきます。」

それだけ書いて、懐中電灯を手にして家を出た。

基地の近くまで来ると、とても苦しそうに子犬が泣く声が聞こえて来た。

ボクは全速力で走った。

「どうした？」

そういうて基地の中へと飛び込むと、そこには泣きながら立つているケイタがいた。

ケイタの手には大きな石があった。

ケイタが何も言わなくともボクにはみんな分かつた。

「可哀想だからな。」

ケイタは泣きながらそう言った。

「でも、できないんだよ・・・オレ。」

「こいつ、こんなにも苦しんでるのに・・・できないんだ。」

震えた声と一緒に、ケイタの石を持つ手も震えていた。

子犬は目を閉じて涙を流し、弱々しく泣きながら、片方の前足だけを異様に伸ばしては痙攣した。

子犬のそんな姿は、まるで何かに救いを求めるように思えた。

鳴き声は徐々に小さくなっているようで、口元に泡を吹きながら痙攣が続けていた。

間もなくして、子犬は少し瞼を開いて、目をきょろきょろとさせはじめた。

まるで何かを探すように・・・。

「ボクがここまで面倒を見たんだんだから・・・。」

そう言つてケイタの手から、持つていた大きな石をボクは取り上げた。

先ほどまでの子犬が痙攣する姿が臉に残る。
だれか・・・た・す・け・て。

ボクも言つた。

「可哀想だもんな…」

ケイタは黙つてうなずいた。

そしてボクは、大きな石を持った右手を振り上げた。
子犬と目が合つた。

そのとき・・・なぜかボクには、子犬がありがとうと言つてるよう
に見えた。

振り上げた腕を下ろすと、溢れ出る涙が止まらなかつた。

その夜ふたりは泣きじやくりながら、一生懸命に墓地のそばに穴を
掘つた。

そこへ子犬を埋めてやつた。
その上には石を積んだ。

最後に、ボクが手にしていた大きな石を乗せた。

ふたりはそこにしゃがみ込んで、泣きながら手と手を合わせ目を閉
じた。

ボクは始めて子犬を見た時の可愛い顔を思い出し、最後に目にした
子犬の顔を思い出していた。

「そりゃいえ、……」

涙をぬぐいながらボクはポツンと呟いた。

「「」この名前、無いままだと可哀想だよ。」

「そうだよな。」

ケイタは泣きながら答えた。

「チロにしてやる。」

「茶色だったからな、チロと言つんだ。」

「チロ、明日お墓に名前を書いてやるからな。」

そう言つて、ボクとケイタは子犬が埋まつている場所に話しかけた。

基地の中に戻つたふたりは、震えながらチロをつつんでいた毛布にくるまつた。

その毛布にはまだ、チロの温もりが残つていた。

ボクにはそれがまるで、

天国からここの冬の寒さに震えるふたりを、子犬が守ってくれている
ように思えた。

きっとケイタも同じように感じていたに違いない。

だからか急に、ケイタは自分に言い聞かすかのように話しを始めた
んだ。

「これでいいんだ、あんなに苦しんでいたんだから。」

「あんなに弱つて、苦しんでいたんだから……」と。

それを聞いてボクはケイタに訊ねた。

「チロ、天国に行けたかな?」

「絶対に行つてるさ。」

「そりだよな、最後に嬉しそうな顔してたもん。」
「俺達が天国でまた飼つてやればいいんだ。」

そしてそうイケタが言つたあとで、ボクは言葉を付け加えた。
「もしボクがチロと同じになつたら、今度はお前がちゃんとやってくれよ。」と。

「当たり前だろ、苦しまないようにするわ。」
ケイタはボクの手を取つてさう言つた。

遠い遠い昔のお話。

ケイタは今でも覚えてるだろ？

そんな小学一年生ふたりが、心を痛め涙で眠つた冬のことを。

そつ、あの時からふたり、この世には神様なんてものはいないといふことを知つたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9719n/>

神様なんていないんだ

2010年10月9日15時28分発行